

思春期・青年期不登校における自己評価と他者評価

—YSR と CBCL を用いた比較検討から—

13001PCM 飯田 愛唯

問題と目的

1. 長期化する不登校

学年をまたいで不登校状態が継続するいわゆる長期化した不登校の子どもたちへの対応の難しさはよく知られている(橋本・是永, 2008)。その主要な背景要因として、高機能の自閉スペクトラム症(ASD)とパーソナリティ障害や精神病へと発展するアタッチメント障害(AD)が想定されるとして、両者の鑑別の必要性が指摘されている(花田, 2012; 大久保, 2013)。

2. 発達障害とアタッチメント障害

花田(2012)や大久保(2013)の研究では、内的体験過程の特性を明らかにすることにより、両者の鑑別が可能であることを示唆すると同時に、主として ASD の子どもの内的体験内容の整理を試みている。

しかしながら、AD の子どもたちが不登校にいたる心理機制や対応方針を定めるための心理特性を明らかにした研究は未だ十分になされていないとは言えない。

3. AD の子どもにおける自己評価と他者評価

坪井・李(2007)は、被虐待児の心理特性について、自己評価と他者評価についての関連性の観点から明らかにすることを目的として調査を行い、自己評価と他者評価の両面から子どもの特徴をつかむことにより、子どもへの対応の方向性についての見立てがしやすくなることを示唆した。

市川(2013)は、児童養護施設入所児を対象に、自己評価と他者評価の相関の低さに注目し、その要因を検討した。その結果、職員と子どもの相関は非行的行動尺度のみで高いことがわかった。また、職員間の評定の相関の高い子どもは、情緒や感情のコントロールがされないままに表出するという特性が見出された。一方、相関の低い子どもは、他者の評価を気にして“良い子”

を演ずる意識が強いことがわかった。

4. 本研究の目的

このように、自己評価と他者評価の間に生じるずれを見ていくことの重要性がこれまでの研究から示唆されているが、これらは全て被虐待児を対象として行われた研究である。

本研究では、被虐待児と同じく AD の基盤を持ちながら不登校という症状形成にいたった事例を対象とし、研究 1 では、自己評価と他者評価の関連性について検討する。さらに、研究 2 では、彼らの心理特性について明らかにすることを目的として事例検討を行う。

方法

1. 調査協力者

中学校・高等学校の不登校生徒を受け入れている G 県内の入寮施設のある S 学園に在籍する、中学 1 年生から高校 3 年生まで、13 歳から 18 歳(平均=15.13 歳, SD=1.60)の生徒 23 名(男子 19 名, 女子 4 名)とその担当者、非担当者の協力を得た。担当者は、対象生徒の担任教師であり、非担当者は S 学園の臨床心理士であった。

2. 調査内容

協力の得られた生徒には YSR (Youth Self Report)とバウムテスト、人物画を実施した。担当者とは個別に封筒に入れた CBCL (Child Behavior Checklist)を配布・回収した。

3. 調査時期・調査手続き

2014 年 9 月～2014 年 11 月にかけて実施した。実施の際には、非担当者から対象者に調査に協力してほしい旨を伝えて頂き、授業時間や授業後に、検査者と 1 対 1 で行った。

研究 1

1. 目的

不登校児における自己評価と他者評価の関連性について明らかにする。

2. 方法

生徒本人のYSRと担当者のCBCLを用いて、自己評価と他者評価について、尺度ごとの相関と個人別の相関を算出した。

3. 結果と考察

本人と担当者間の尺度ごとの相関を求めた結果、全ての尺度において、強い正の相関または、比較的強い正の相関がみられたことから、本人と担当者の間における認識のずれは少ないことがわかった。

また、最も相関の高かった尺度は、攻撃的行動($r=.823, p<.01$)であり、強い正の相関がみられた。このことから、攻撃的行動は担当者と子ども間で共通して認識されていることがわかった。

さらに、各生徒について、本人と担当者の間における相関を求めたところ、相関の高い生徒($r=.574, p<.01$)から相関の低い生徒($r=-.124, n.s.$)まで多様であった。本人と担当者間に比較的強い相関がみられたのは23人中5人、弱い相関がみられたのは10人、残りの8人については、相関がみられなかった。一方、市川(2013)が研究を行った児童養護施設入所児においては、本人と担当者間で比較的強い相関のある児童・生徒が1人もいなかった。このことから、不登校を主訴とする子どもたちは、広い意味で親からの虐待を背景要因として施設収容された児童養護施設の子どもたちとは異なり、自己評価と他者評価の相関が高いことがわかった。

そのことに関連する要因としては、家庭という守られた環境から切り離されていないこと、年齢が高いこと、症状が不登校という社会参加不安に集約されることの3つの点が考えられた。

研究2

1. 目的

自己評価と他者評価の相関の高い生徒と相関の低い生徒それぞれの心理特性の違いについて、事例を通して検討する。

2. 方法

研究1において、本人と担当者の相関の高かった生徒と相関の低かった生徒1名ずつを対象

とし、YSRとCBCLおよび、バウムテストと人物画の結果を合わせて、事例検討を行う。

3. 結果と考察

(1) 本人と担当者間の相関が高かった事例

本人のYSRと担当者のCBCL両者において総得点の適応水準が臨床域であり、問題行動が多い。また、対人関係パターンは、自我防衛の脆弱性により、内的体験を人に打ち明けないで秘密にしようとしても意識されないうちに、外に漏らすように表出する結果となり、強い自我漏洩感を抱いている。

(2) 本人と担当者間の相関が低かった事例

本人のYSRと担当者のCBCL両者において正常域であり、表出される問題行動は少ない。対人関係パターンは、他者の視線を気にしすぎるあまり、表情を隠し、自己表出が抑制され、関係回避的な傾向が強いという特徴が見られた。

総合考察

1. 自己評価と自己イメージ

自己評価と他者評価のずれの大きさは、子どもの中に生成される自己イメージの拡散や歪みに発展する可能性があり、それが、対人関係回避に繋がる一方、そのずれが少ない場合には、自我漏洩感と防衛不全の感覚を増幅する場合がある。症状との関連において、背景にある心理特性を探る手掛かりとなりうるものと思われる。

2. 思春期課題への視点

藤島(2013)も指摘しているように、今回の検討事例からも、思春期において、精神病の発症リスクを抱える場合が想定された。こうした事例は少なくないものと考えられ、登校圧力のかかる方針や内的葛藤を探ることに繋がる対応については、発症の引き金となる可能性のあることが示唆される。

3. 生活体験と自己イメージの統合

長期化した青年期不登校の子どもの病態水準は軽くはないことが明らかとなった。対応の基本は、肯定的な自己イメージの生成を導くとともに、その拡散や歪みを修復する関係性の確保にあると言える。そうした関係性と合わせて、生活体験の中で、生活者としての自己を育てていくような支援が必要となると考えられる。